

【体験版】

男の娘（こ）の憂鬱

夏目 なつめ

棗 なつめ

□□登場人物□□

●弟Ⅱ薫（かおる）。小柄で痩身。髪も長く伸ばしているので一見女の子にしか見えない。声変わり前の声も殆ど女の子の声域と変わらない。○学三年。



●姉Ⅱ千歳（ちとせ）。身長…152cm、体重…48kg、スリーサイズ…90（Dカップ）・59・87。○校一年。薫の姉。あまり大きくはないがITベンチャー関連会社の社長令嬢。

「お姉さま……き、着替えてきました……こ、これでいいですか？」

部屋に入り扉をロックして振り返った弟が、パジャマ姿でベッドに座り自分を見詰めている姉に途惑い勝ちな声で訊いた。いつものようにパジャマの上しか羽織っていない姉の胡坐座りに弟の視線が泳いでいた。

しかし、姉は素知らぬ顔で言ったのだった。

「ふうん、あんたつてば、厭になるくらい……そういう格好が似合うわねっ！」

弟の**ワンピース姿**を足元から頭のとっぺんまでねめ廻して、姉が呆れたような声をだした。

ひとつ歳下とはいえ姉より小柄で痩身な彼のウエストサイズは常に姉の怒りを買っていた程である。更に母親の嗜好で髪も腰に届こうかという程長く伸ばさせられていた弟は、一見女の子のようにしか見えなかった。そんな身体的特徴に起因するのか声変わり前の声も女の子の声域と殆ど変わらない。だから、ワンピース姿の弟は、まるで双子の妹が現れたかのようにだった。

「ぼ、ぼく……は、恥ずかしい……です……」

「『ぼく』じゃ、ないでしょ？……あんたは今、女の子なんだから『わ・た・し』でしょ？」

「ご、ご免なさいお姉さま……わ、わたし……は、恥ずかしい……です……わ……」  
慌てて言い直す弟を姉が揶揄（からか）うように見遣った。

「そう、そう……今夜は、ずっとそうやって女の子言葉で通す約束でしょ、いいわね？」

上目遣いで、おどおど、と視線をさ迷わせ、短いワンピースの裾を気になる様子で引つ張る弟の姿は、何処からどう見ても女の子にしか見えない。そんな自分の容姿にコンプレックスを抱いている弟は常日頃から男っぽく振舞おうと努めていたが、とても効果があがっているようには見えなかった。

何より押しに弱い性格が、幼少時より母と姉の体の善い『おもちゃ』にされていた弟だったのだ。幼少時は姉のお下がりの少女服を着せられても、周りの『可愛い、かわいい』という声にはにかむだけだった彼も、流石に小学校にあがる頃にはそれ（少女服）だけは拒むようになっていた。けれど、その代案として母から髪を切る事を禁じられた彼は、それを受け入れざるを得なかったのだ。

そして今夜、仕出かしてしまった『過ち』の罰として姉からワンピースを着る事を

命じられてしまったのだった。

そんな弟の姿をねめ廻していた姉の視線が、逸早く弟の身体に現れた異変に気がついていた。

けれど姉は素知らぬ顔で弟に優しく問い掛けたのだった。

「パンティもちゃんと穿き替えてきたのかしら？」

わざと『ぱんつ』でも『ショーツ』でもなく、滅多に使わない『パンティ』という言い方をしたのは、勿論、その単語が弟の羞恥心をより煽る事を知っていたからだ。

案の定、弟は真っ赤になって恥ずかしそうに頷いた。

「それじゃあ、見せて頂戴……あたしの、パンティっ♪」

「え？……ええ？」

弟が泣きそうな顔でまたも視線をさ迷わせた。

「だって……穿いてみたかったんでしょ？……あたしの、パンティ？」

「ぼ、ぼく……わ、わたしは……そんなつもりじゃ……」

「あら？……それじゃあ、何故、洗濯機の脱衣籠から持っていったの？……あたしのパンティ？」

わざと眼につくように置いた事などおくびにもださずに姉が白々しく訊いた。

判り切っている事をわざわざ訊いてくる姉を、恨めしそうに見返して弟が口籠る。

「穿いてみたかったから持っていたんでしょ？」

しかし、姉に重ねて言われて弟が重い口を開いた。

「も、もうしませんから……ゆ、許してください……お姉さま……」

「うくん……でもお……初めてじゃないものね？」

姉が口の端を吊りあげて糾弾する。

「……………」

事実を指摘されて弟がまた項垂れてしまった。

「ね？……良い子だから、ほら見せてごらん？……きっとあなたには似合ってるわよ、

あたしのパンティ♪」

姉がまた揶揄（からか）うように、しかし優しく語り掛けた。

弟にとっては見せるに見せられない『事情』があつたのだが、姉は既にその『事情』を見抜いていたのだった。しかし、姉はそれをおくびにもださずに優しい声で言ったのだった。

「ほら、裾を捲って見せて頂戴……は・や・くっ♪」

尚も言い募る姉に、諦めたように頬を染めて弟は少しだけワンピースの裾を捲りあ

げた。

「うふっ♪……やっぱり似合ってるわよ、あたしのピンク色のパンティ♪……いやだ、そのフリルなんて、あたしが穿いた時よりも可愛く見えるじゃないの？」

気づかれずに済んだのだろうか……弟が姉の声音に、ほっ、と息を吐いた時だった。「でもお……その、もっこり、とした膨らみは……何かなあ？」

姉が愉しそうに弟の隠したかった『事情』を指摘した。

「こ、こ、こ、これは……」

慌ててワンピースの裾を降ろしてしまった弟に姉の叱責が飛んだ。

「誰が降ろしていいって言ったかしら？」

きつい口調で叱責されて、びくんっ、と竦みあがった弟に、姉がまた優しく言い聞かせる。

「ね？……もう一度、今度はパンティが全部見えるように上まで捲るのよ？……できるわよね？」

声音とは裏腹に拒否を許さぬ雰囲気が漂っていた。

弟が、おずおず、と姉の言葉を実行に移す。

食い入るように弟の手元を見詰めていた姉が、突然、弾けたような笑い声をあげた。

「きゃははははあつっ!? …… やつだあつ! …… お顔が、お顔が覗いてるわよおっ♪」  
瞬時に耳まで真っ赤になった弟は、降ろすに降ろせぬワンピースの裾を握り締めて羞恥に身を振った。

「何でかなあ? …… どうして、そんなになっちゃったのかなあ?」

「……………こ、これは……………」

弟が視線を逸らせて言い淀む。

「どうしてかなあ? …… あたしのパンティはあ、確かにちっちゃいけどお……………でもお……………それって、もしかしてえ……………」

姉が揶揄（からか）うように、愉しそうに、歌うように、言った。

「……………勃起、しちやった?」

「……………ううう……………」

真っ赤になった顔を隠すように俯いてしまった弟を可笑しそうに見遣って姉がベッドの上で両膝を立てた。就寝時はいつもパジャマの上しか着ない姉の股間に弟と同じピンク色のショーツが覗いていた。

隠し見ているようでも、ちらっ、ちらっ、と股間に注がれる弟の視線を愉しむように、姉が言った。

「ほら、あんたとお揃いの色にしたのよ……見えるでしょ？……あたしのぱんつ……うん、パンティが？」

「み、みて……見てませんっ！」

あからさまに動揺して視線を逸らせた弟が慌てて言った。

「あら、見てないの？……別に見ても良かったのにい！」

白々しく嘯（うそぶ）いて姉はパジャマの裾で股間を隠してしまった。

「それより、お姉ちゃんは、あんたのパンティ、もつと良く見たいなあ？」

姉が自分の事を『あたし』でなく『お姉ちゃん』と言う時は、弟に有無を言わせず何かを要求する前触れなのを弟は体験的に厭という程知っていた。

「ほら、もつとこつちへいらっしやい……」

語り口は優しくかったが拒否を許さぬ雰囲気、ありあり、と伝わってくる。最早、弟は蛇に睨まれた蛙だった。

「すっごーいっ！……いくらあたしのパンティが小さいからって……雁首まで、でてるわよ……これ？」

あからさまに驚いたような声をあげて姉が弟の羞恥心を煽る。

「それにい……ねえ、あんたのおちんぼ、剥けてるわよ？……前に見た時は剥けてな

かったわよね？……声変わりもまだなのにい、お毛けだつて殆ど生えてないのにい、  
こくんなにやらしく《ずる剥けおちんぼ》勃起させて……」

姉が挿掄（からか）うようにそう言つてから、ぼそつ、と付け加えた。

「変態っ！」

「なっ！……ぼ、ぼく……わ、わたしは……そんなんじや……あ、ありません……」

必死に言い募る弟の言葉に被せるように姉が言つた。

「そうかしら？……お姉ちゃんに何かして欲しいからあ、こんなに勃起しちやつたん  
じゃないの？」

以前、今夜のように露見した『過ち』の折にされた甘味な『お仕置き』が弟の脳裏  
に甦る。また同じ『過ち』を犯したのは、もしかしたらあの『お仕置き』を、何処か  
で期待していたのではなかったか。

「ふふん ♪……凶星、かなあ？」

「……………」

「また、だんまり？」

頬を染めて困つたように視線を逸らす弟に姉が優しく諭すように言つた。

「ほら、もっと良く見せて、あなたの《ずる剥けおちんぼ》っ♪」

しかし、途惑うように見返す弟に姉が言い聞かす。

「判らないの？……困ったちゃんね！……あんたのばんつ……ううん、あたしのパンティを膝まで降ろしなさいって言ってるのっ！」

その言葉に微かな期待をその瞳に滲ませて弟がショーツを摺り降ろした。

「そしたら、またワンピースを捲るのよ！」

真つ赤になりながらも期待に頬を緩めた弟が姉の言葉を実行して恥ずかしそうに見返した。

「きやはははあっ♪……お、お腹に貼りついてるわよ、あんたの《ずる剥けおちんぽ》っ♪」

姉がベッドを軋ませて弟ににじり寄ると、右の手指をその勃起した《逸物》に差し伸べた。

思わず眼を瞑った弟はしかし、あつさり、と期待を裏切られる。

《逸物》に向かって伸ばされた筈の姉の指先は弟の下草を摘んだだけだったのだ。

「うふっ♪……まだこれっぽっちしかお毛けも生えていないのに、あんたの《ずる剥けおちんぽ》は大の大人並ね？……ううん、馬並……かなあ？」

「……あ、あの……お姉さま……」

瞑っていた眼を開いて弟が切なそうに訴える。

「なあにい？」

「……え、えつと……その……」

弟の言葉をスルーして姉は尚も下草を、つん、つん、と摘みあげる。

「あら、もしかして……こうしてお毛けを、つん、つん、して欲しかったのじゃないの？」

「……お、お姉さま………い、いじわる………ですう！」

弟が泣きそうな顔で尚も訴える。

「ふうん、おちんぽを………あんたの《ずる剥けおちんぽ》を触って欲しそうね？……握って扱いて欲しいのかな？」

揶揄（からか）うような姉の声に弟が情けなさそうに、くび、くび、と頷いた。

「それともお……」

姉がますます顔を《逸物》に近づけて歌うように囁いた。

「…あたしのお口で、このやらしい匂いのする《ずる剥けおちんぽ》を舐め舐めして欲しいのかなあ？」

え？……という顔で弟の頬が緩む。前回の『お仕置き』ではして貰っていない甘味

な誘いに弟の《逸物》が、ぴく、ぴくんつ、と震えた。

「きやははっ！……やあだ、あんたの《ずる剥けおちんぼ》の先っぽからお涎（よだ）が滲んできたわよお？」

少女のような容姿にはあまりにもそぐわない反り返る《逸物》の先端で、膨らんだ亀頭の鈴口から滲みでた透明な液体が、ぷくうつ、と珠を作っていた。

「……………こ、これは……………」

しかし、姉は蔑むように言い放った。

「こんなばつちいモノ、舐めるなんてご免だわっ！」

それから、ふと、思いついたように身体を後ろに移動させて右足を真っ直ぐ伸ばした。

「ほら…………お姉ちゃんの足を貸してあげるわ♪」

姉は、にまつ、とほくそ笑んで残る左足を両手で抱えるように立てるとその膝に顎を乗せて弟を見遣った。

姉の伸ばした足先の少し上辺りに弟の《逸物》が震えていた。

「…………あ、あの…………お、お姉さま？」

姉の意図が図り兼ねて、ワンピースを捲りあげて股間を曝けだしたままの弟が困っ

たように見降ろしている。

「判らないの?……あたしは足を動かしてあげないわよ?」

「え?……で、ですから……」

尚も途惑いを滲ませる弟に姉がさも愉しそうに言ったのだった。

「自分で擦るのよっ!……あたしはこうしてるだけだから、あんたが、自分で、あたしの足の裏にそのやらしく勃起させた《ずる剥けおちんぼ》を擦りつけてごらん、と言ってるのっ!」

「えっ?」

と、弟が途惑ったように姉を見返した。

以前、『お仕置き』の名の下にされた『手コキ』こそ（勿論、そんな呼び名すら知らなかったが）性的に未成熟だった彼にとつての『精通』（注…生まれて初めて射精を経験する事）だったのだ。以来、その姉の手指が忘れられず自ら扱いた夜も数知れずだった。しかし、姉の手指の与えてくれた快感には遠く及ばず、とうとう今夜、同じ『過ち』を犯してしまったのも、あの『お仕置き』を期待していたのに違いない。「……ああ、それからあんたの両手は捲ったワンピースを握ってるのよっ!……自分でおちんぼ扱いたら、その場で止めるわよっ!」

言った言葉を弟が理解したかを探るように見詰めて、姉が付け加えた。

「だって、そうでしょ？……あたしが、しこしこ、してやったら『お仕置き』にならないじゃない？」

嘲笑うようにそう言う姉を、弟が情けなさそうに見降ろしていた。

「ほら、ほうらあつ！……あんたのおちんぼは擦りつけたそうに震えてるわよ？」

その言葉に、先程から焦らされ続けていよいよ堪え切れなくなった弟は、促された行為を良くは理解できないながらも、腰を屈めて姉の足裏に《逸物》を擦りつけたのだった。

「……あははっ♪……や、やだあ……ホントに自分で擦りつけてるう♪」

姉が笑いながら蔑むように言った。

「……ほんと、変態だね？」

申し訳ありませんが体験版はここまでです。

こちらの体験版にて、作品の雰囲気などをご確認戴けたらと思います。

お気に召しましたら、本篇もどうぞ宜しくお願い致します。

尚、本作は当初、音声タイプアップ作品として構想したものです。【ツンツン姉視点の音声作品】、【オドオド弟視点の音声作品】、【第三者視点の小説版】の三通りの愉しみ方をして戴けるよう考えておりました。しかし、「小説版」と「ツンツン姉シナリオ」は早々と仕上がったのですが、「オドオド弟シナリオ」が気に入った形にならず、もう一度練り直す事にしました。

けれど、折角「小説版」が完成しているのでプレビューがてら発表する事と致しました。単独の小説としても愉しめるよう創っているつもりですのでお読み戴ければ幸いです。

いずれ音声作品が仕上がった場合は別建てでDLして戴けるようにするつもりであります。

ただし、先行き「小説版」のヴァージョンチェンジもあり得ますので、できるだけ（再DLが無料の）ユーザー登録して戴いた上でDLして戴ければと思います。

それでは、どうぞ宜しくお願い致します。